1. 検　診
2) 野球・サッカーのスポーツ検診における超音波画像検査

鈴江　直人　徳島赤十字病院整形外科

徳島県では，全国に先駆け，1981年より小学生野球選手に対して野球肘検診を行っている[1]。また，3年後の1984年からは，小学生サッカー選手に対しても検診を開始した[2]。共にスポーツによる発育期の骨軟骨障害を早期に発見する目的として，われわれスタッフがスポーツ現場へ出向いて検診を行っている。開始から20年以上はスタッフによる身体所見のチェックのみであったが，2005年からは現場で超音波検査を導入するようになった[2]。本稿では，現場検診で超音波検査を行うようになった経緯，その有用性および今後の展望について述べる。

検診のシステム

徳島県では，野球，サッカーとも，夏季に県下の全小学生チームが参加するトーナメント大会が開催されており，この大会期間に検診を行っている（図1，2）。あらかじめ大会の約1か月前に参加チームに対してアンケートを配布し，痛みの有無などを記載して返信してもらっている。アンケートを基に大会会場でスタッフが一次検診を行い，発育期骨軟骨障害が疑われた選手に対しては，協力医療機関での二次検診を勧めている。二次検診では，画像検査などを実施して診断を確定し，必要な選手に対しては適宜治療を行っている。

野球肘検診の変遷

野球選手の障害の好発部位は肘，肩である。特に，投球による肘関節障害は野球肘と呼ばれ，肘の内側，外側，後方などのさまざまな部位に発生することが知られている。その中でも，発育期において外側の上腕骨小頭に発生する離断性骨軟骨炎（以下，OCD）は，特に重症度が高く，適切な治療がなされずに悪化すると，野球はおろか，日常生活にも支障を来す可能性がある疾患である。一方で，早期に発見できて適切な治療を行えば，本来の形状に修復が可能であるため，検診は主にこの肘OCDを早期に発見する目的で開始された[1]。

1. 第1期（1981～2004年）

第1期の一次検診では，スタッフが肘の可動域制限，圧痛，ストレス痛の有無をチェックし，これらの項目で陽性となった選手に対して，医療機関での二次検診を勧めていた。しかし，検診の対象疾患

図1　小学生野球大会での検診
大会会場の一角にテントを設け，その中で実施している。

図2　小学生サッカー大会での検診
大会会場の会議室や離れの施設を用いて実施している。

〈0913-8919/21/￥300/ 論文 /JCOPY〉